

競技規則運用に関するガイドライン（2018年7月1日 IHF 施行）を受けて

2018年6月29日 IHF より送付



2018年7月7日 JHA常務理事会報告

(公財) 日本ハンドボール協会競技本部

審判委員会

IHF 競技規則審判委員会(以下IHF-PRC)は、競技規則の専門家と共同で、ルール解釈において課題があったいくつかの項目について議論を行った。

その結果、特定の状況における正しい判定を明確にする意図で、下記の通り「競技規則運用に関するガイドライン」(2016年7月1日施行)を更新および追加をすることで合意した。

なお、この改訂版は、IHF では2018年7月1日より施行している。

日本国内では、8月1日より施行する。ただし、全国高校総体(7月27日開幕)においては先行実施とする。

競技終了 30 秒間

2016年版競技規則 8:10c および 8:10d は、競技終了間際にスポーツマンシップに反する行為によって、違反したチームが試合に勝つことを許さないことを目的としている。同時にこの競技規則は、違反されたことによって失われた攻撃のチャンスを保証し、観客にとっても競技終了までスリリングのある試合を楽しませることにある。

競技規則 8:10c では競技終了間際にスローを実施させなかった、または遅らせた場合は7 m スローによって罰せられる。また競技規則 8:10d では、競技終了間際にボールがインプレー中にプレーヤーやチーム役員による失格相当の違反行為が行われた場合、7 m スローによって罰せられるとなっている。後者(8:10d)については解釈に大きな問題はない。

競技規則 8:10c は、競技の中断中に防御側プレーヤーが相手のスローの実施を妨げたまたは遅らせた場合に適用されていた(例:各種スローに対して、3 m より近い位置でブロックした場合は適用していなかった)。しかし、現行の競技規則では、レフェリーやプレーヤー、その他ハンドボール関係者を誤った解釈に導いたり、例え上記例のような明らかなスポーツマンシップに反する行為があったとしても、違反をしたチームが試合に勝つことを可能としているなど、悪いイメージを与えることとなった。

以上の理由で、IHF は IHF-PRC と指導技術委員会(CCM)で構成された「新競技規則に向けてのワーキンググループ(NRWG)」を結成し、現行のガイドライン「3 m の距離を確保しないとき(8:10c)」を追加することにした。3 m の距離を確保せず、スローを行おうとしたプレーヤーに対して不当行為を行った場合でも、失格および7 m スローの判定をするということになる。その他の項目においても、現行のガイドラインの更新および新ガイドラインを設定する。

<ガイドラインの更新>

“3 m の距離を確保しない”とき(8:10c)

競技終了 30 秒間で各種スローの実施時に相手が 3 m の距離を保とうとせず、スローができなかった場合、失格および 7 m スローを判定する。

この解釈は競技終了 30 秒間であっても、いわゆるノータイムスロー（2:4 の第 1 段落）であっても、行われたスローの結果を妨害した場合も適用することを意味する。この状況におけるレフェリーの判定は（17:11 における）事実判定である。

競技終了 30 秒間で各種スローに直接関連しない違反で各種スローができず試合が中断した場合（例 不正交代、交代地域でのスポーツマンシップに反する行為での違反など）、競技規則 8:10c を適用する。

もし、各種スローの実施の際に、3 m より近い位置にいる相手プレーヤーが、例えばブロックするなどによりスローの結果やスローの実施を**積極的に妨害**した場合、競技規則 8:10c を適用する。

3 m より近い位置にいるが、スローの実施を積極的に妨害しなかった場合は罰則を適用しない。各種スローの実施の際、3 m より近い位置にいて、シュートをブロックしたり、パスをインターセプトした場合も競技規則 8:10c を適用する。

その他の項目

<ガイドラインの更新>

負傷したプレーヤーの救護(4:11)

衝突などにより同じチームの複数のプレーヤーが負傷した場合には、レフェリー・TD はこれらの負傷したプレーヤーを救護するために、規定人数より多くコートに入る許可を与えても良い。この場合、1 人のプレーヤーに対し最大 2 名までとする。レフェリー・TD は、許可されてコートに入った者を監視する必要がある。

<新ガイドライン>

パッシブプレーにおけるパスのカウント(7:11, 競技規則解釈 4, 付録 3 の例 13・14)

シュートがブロックされ、ボールが再びシュートしたプレーヤーに戻ってきた場合や、チームメイトに戻ってきた場合は、（ボールを保持した時点で）1 回のパスとしてカウントする。

<新ガイドライン>

競技規則 8:5 注に関連したゴールキーパーの失格

これは、ゴールキーパーがゴールエリアから、またはゴールエリア付近からプレイングエリアで相手と正面衝突をした時に適用される。例えば、交代地域からコートに入り、相手と同じ方向に向かって走り込んできた場合、この条文(8:5注)は適用されない。(交代地域からコートに入り相手と接触した場合、競技規則8:5注以外の理由で失格を判定される場合もある。)

<新ガイドライン>

無人のゴールと 7 m スローの判定(14:1, 競技規則解釈 6c)

競技規則解釈 6c では、ゴールキーパーがゴールエリアを離れていて、そこでボールと身体をコントロールした相手が無人のゴールにボールを投げるといふ、誰にも阻止できない明らかなチャンスを得たときに 7 m スローを与えると定義されている。これは、ボールを持ったプレーヤーは、明らかに無人のゴールに向かって直接シュートを狙おうとしていることが前提となる。

明らかな得点チャンスの定義には、違反の種類やインプレー中かどうかにかかわらず、スローを行うプレーヤーまたはチームメイトが正しい位置にいることも含まれる。

<新ガイドライン>

ビデオ判定の導入

ビデオ判定の導入によって、得点かどうかの判定が必要とされる場合、得点の取り消しは現行では次のスローオフまで(9:2)となっているが、より長い期限が必要となる。その期限を、次のスローオフまでではなく、スローオフのあと、次のボール所持が変わるまでとする。

<新ガイドライン>

プレーヤーが異なった色や番号でコートに入った場合(4:7, 4:8)

競技規則 4:7 および 4:8 に関する違反については、ボールの所持を変更しない。これは競技を中断させ、間違いを正すだけでよく、中断された時点でボールを所持していたチームによって競技は再開される。